山口県美濃ヶ浜遺跡出土の滑石製模造品

岸本　晴菜

はじめに

当館では，広島県立府中高等学校（以下，「府中高校」とする。）の地歴部が調査・収集した約28，000点に及ぶ考古資料を所蔵している。府中高校考古資料の多くは未報告の資料であり，その中に含まれる美濃ヶ浜遺跡[(1)]の資料も例外ではない。そこで，本稿では府中高校考古資料の美濃ヶ浜遺跡出土資料のうち，滑石製模造品について紹介するとともに，中国地方出土の滑石製模造品と比較検討することで，瀬戸内地域で出土する滑石製模造品の意義を考えていく上での一助としたい。

1　遺跡の概要と府中高校による調査

遺跡の立地　美濃ヶ浜遺跡は，山口県山口市の南部，現在は砂堆で結ばれ陸繋島となっている，周防灘に突出した秋穂二島に位置する。後期旧石器時代，縄文時代前期～晩期，古墳時代中期～終末期にかけての遺跡である。とりわけ，古墳時代には製塩遺跡として著名であり，本遺跡から出土した製塩土器は「美濃ヶ浜式土器」として，西部瀬戸内の製塩土器編年の指標となっている（渡辺2000，小南2012）。

既往の調査　美濃ヶ浜遺跡では，現在までに数回の発掘調査が行われている。最初の発掘調査は，

第1図 美濃ヶ浜遺跡の位置（1/25,000）

大正14年（1925）の旧制山口高等学校郷土史研究会によるものである（小川1925）。この調査では，縄文土器包含層が発見され，山口県初の縄文遺跡として注目された。また，縄文土器包含層の上層には，土師器と須恵器の包含層があることが確認され，この層から，用途不明の土器が大量に出土し，「把手様土器」として報告されている。これが，のちに美濃ヶ浜式土器と命名される製塩土器であった。このほか，滑石製模造品や土製模造品が見つかっている。

その後，昭和35年（1960）に山口大学・広島大学・岡山大学・鳥取大学と山口市教育委員会で組織された美濃ヶ浜学術調査団による調査が行われた。五つの調査区に分けて行われたこの調査では，山麓側で古墳時代の住居が２軒，小型の土坑１基の集落遺構と製塩遺構と考えられる炉跡が検出されている（小野1961，渡辺1994，磯部2000）。この調査は，古墳時代の製塩遺跡として山口県初の事例となったが，概要報告に留まっており，本報告の刊行には至っていない。

以降，昭和39年（1964）に山口大学，昭和58年（1983）に山口市教育委員会による分布調査，平成２年（1990）に同教育委員会によって緊急発掘調査が行われている。

府中高校による調査　府中高校では地歴部という部活動を昭和16年（1941）に発足させ，豊元國教諭を顧問として中国地方を中心に精力的に活動してきた。発掘調査や研究の成果は，部誌である『芸備文化』や『地歴』に掲載するほか，日本考古学協会総会等の学会で発表するなどしている。府中高校地歴部の活動は，広島県における考古学の黎明期において，その発展を担ってきたといえる。

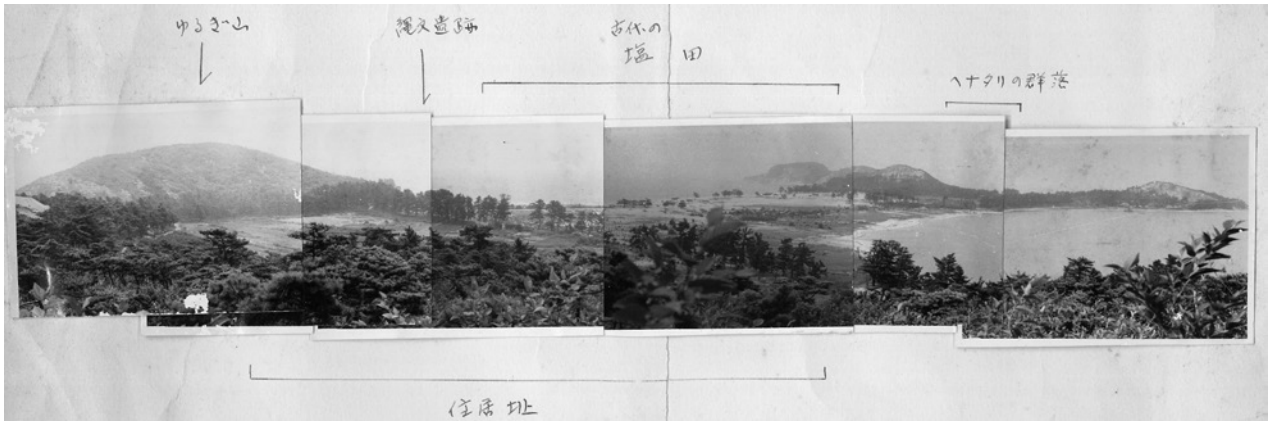


写真1　美濃ヶ浜遺跡遠景（1957年，兜山から南方向を望む）

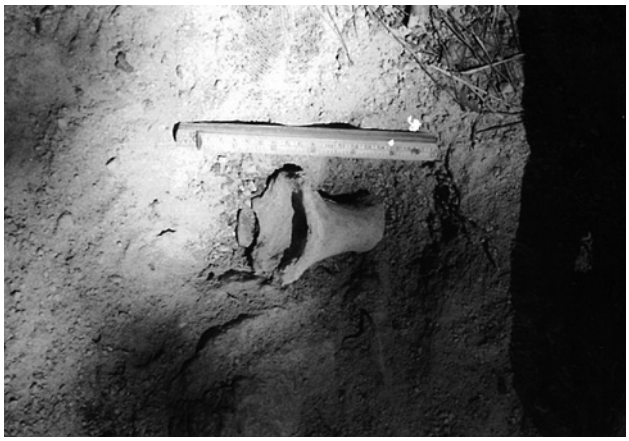


写真2　府中高校の美濃ヶ浜遺跡調査風景
左：調査風景　右：美濃ヶ浜式土器出土状況

様々な地で調査を行ってきた府中高校地歴部であるが,まずは美濃ヶ浜遺跡の調査に至るまでの経緯を述べておきたい。地歴部顧問であった豊氏は,製塩土器として知られる師楽式土器[(2)]に比較的早い段階から関心を寄せていたようである。師楽式土器の用途が明確になっていなかった昭和20年代,豊氏は師楽式土器が散布・出土する地点やその出土状況の傾向から,当該土器が製塩に関係するものと推測し,調査を進めている(豊1957)。昭和24年(1949)香川県坂出市の沙弥島の踏査をはじめとして,昭和28年(1953)から昭和29年(1954)には,瀬戸内地域の古代製塩村落の調査を目的に,広島県内島嶼の調査を行い,考古学的視点からのみでなく,人文地理学的な視点もあわせて,師楽式土器を用いた製塩文化を追究している(豊1955)。

そして,瀬戸内における製塩文化の実態解明のため,昭和32年(1957)に豊氏が調査地に選んだのが,山口市及び防府市であった。豊氏は,『日本書紀』の仲哀紀にみられる,「(天皇を)周防の沙麽の浦に迎えて魚塩の地を献じ,逆見の海を塩地とする」という内容から,沙麽の浦を山口県防府市(旧佐波郡)と比定し,塩地とされた逆見の海も防府市周辺にあると考えた(豊・善入1957)。つまり,防府市周辺において,製塩土器である師楽式土器が出土する,製塩遺跡があると考えたのである。こうした考察のもと,昭和32年(1957)の春と夏に現地調査を行った結果,美濃ヶ浜遺跡にたどり着いた。この調査では,美濃ヶ浜の砂浜に製塩土器片が散布していること,兜山の麓に土師器・須恵器と滑石製模造品が散布していることが確認された[(3)]。調査時に撮影された遺跡の遠景写真には,現地調査で得た知見を反映させたと思われる,「住居址」,「古代の塩田」などの注記がみられる。

また,この際に美濃ヶ浜遺跡の北にある兜山古墳の調査もあわせて実施しており,石室の実測図や記録写真が残されている。製塩という生産活動のみを取り上げるだけでなく,古墳等も含めた調査を行うことで,製塩に関わる人々の営みを描き出そうとしていたのだろう。

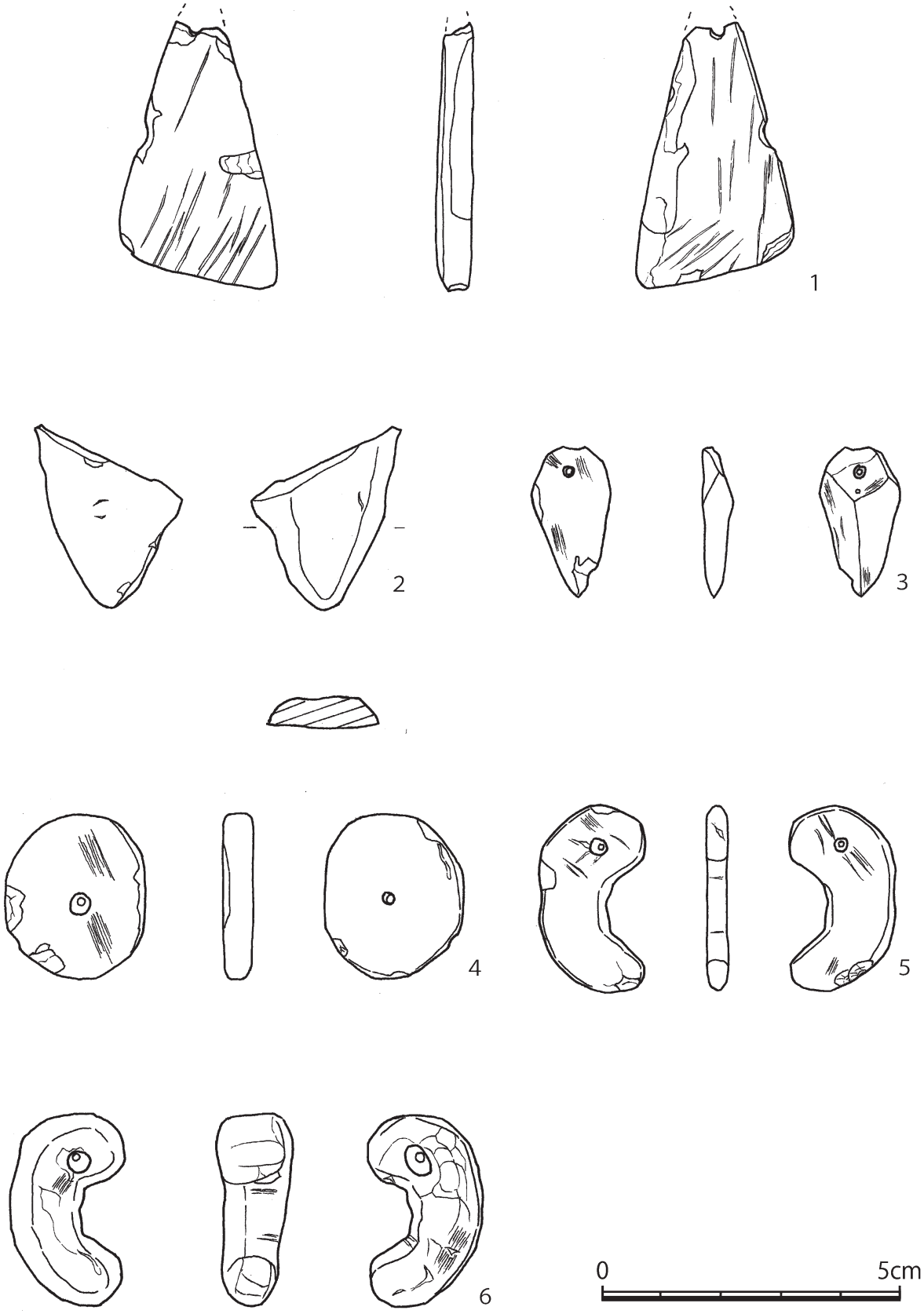
府中高校地歴部による美濃ヶ浜遺跡を含めた山口県における調査成果は,昭和32年(1957)に「古代の製塩村落」として広島史学研究大会で発表されているほか,翌年の同研究大会でも「防府市の古墳集落」と題した発表を行っている。

2　資料の紹介

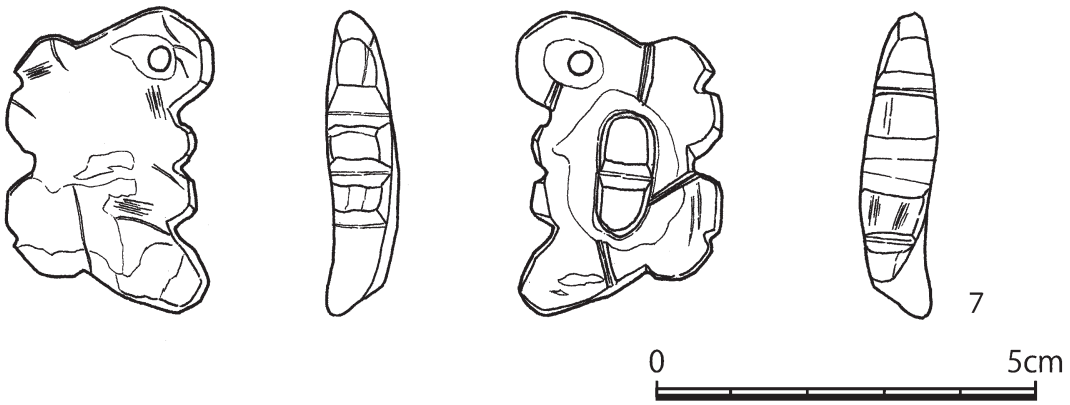
本稿で紹介するのは,府中高校考古資料の美濃ヶ浜遺跡出土資料のうち,滑石製模造品７点である[(4)]。斧形１点,剣形２点,有孔円板１点,勾玉２点,子持勾玉１点がある。

１は台形のように下部に向かって広がる形状から,斧形と推測され,残存長4.5㎝,最大幅2.6㎝を測る。斧形の石製模造品としては大型の資料である。穿孔時に折損したのか,上端部が欠損している。全体的に斜め方向の粗い研磨痕が明瞭に残っているが,穿孔が施されていることから完成品もしくは、完成品に近い資料であると思われる。下端部は直線ではなく,斜めに加工されている。石材は光沢がある部分が多く含まれる上,片岩質であるため,材質としては蛇紋岩に近い。

２・３は剣形の滑石製模造品である。２は残存長3.1㎝,最大幅2.5㎝,厚さ0.5㎝で下半分と思われる部分しか残っていないが,その形状から剣形の模造品であると考えられる。全体に丁寧な研磨が施され,表は平らな面を３面作り出している。１の石材と酷似しているが,１と比べて黒色が強く,層状の剝がれが見受けられる,片岩質の石材である。３は全長2.5㎝,最大幅1.33㎝,最大厚0.5㎝を測る。下端を一部欠損しているが,ほとんど完形である。全面的に粗い削痕は残っておらず,入念な



第2図　美濃ヶ浜遺跡出土　滑石製模造品１（1/1）



第3図　美濃ヶ浜遺跡出土　滑石製模造品２(1/1)

研磨で仕上げられている。孔径は約0.2㎝と小さく,両面穿孔が施されており,孔内には螺旋状の痕跡が明瞭に残っている。石材は１～３の滑石とは質が異なり,白色が強く黒雲母状の鉱物が含まれ,鉄分が筋状に入る滑石が用いられている。

４は径2.8×2.45㎝,厚さ0.3～0.4㎝の有孔円板である。正円ではなく,平らに形作られている部分があり、全体に光沢がある。片面穿孔により孔径0.1㎝の孔が１カ所あけられており,孔内には螺旋状の痕跡が認められる。３と同様に,白色が強い滑石を使用している。

５は勾玉である。長さ3.1㎝,最大幅1.8㎝,厚さ0.4㎝を測る。板状に加工した滑石を研磨することで成形しているとみられ,勾玉特有の丸みを帯びた形態ではなく扁平である。一部に鋭利な鉄器でついたと思われる条痕が残っているが,研磨は全体的に丁寧に施されている。両面穿孔で孔が穿たれており,孔径は約0.2㎝である。

６も勾玉であるが,５のような板状の形態ではなく厚みのある,いわゆる通常の勾玉の形態で,長さ2.9㎝,最大幅1.9㎝,厚さ1.3㎝を測る。丁寧なつくりとは言い難く,表面は凹凸が目立つ。研磨で成形・調整したというよりも,鉄器で表面を面的に削りながら形作っているという印象である。腹部の側面には,鋭利な鉄器でつけられたとみられる条痕が明瞭に残っている。両面穿孔で,孔内には螺旋状の痕跡が認められる。黒色が強い滑石を使用しており,鉄分を含む茶褐色の部分が多く見受けられる。

７は長さ4.0㎝,最大幅2.7㎝,厚さ0.9㎝の子持勾玉で,厚みや立体感に乏しく,平面的な形状である。中央にある子勾玉は親勾玉を彫りくぼめることで形作られている。背部の子勾玉は２つで,かまぼこ状の曲線を持った形に削り出した後に,その中央に山形の切り込みを入れている。これらは簡単な削り出しで作出されているほか,特に腹部の子勾玉はかなり形骸化されている。また,背部側２カ所,孔付近に１カ所,下部に１カ所の計４カ所に約0.1㎝の幅の条線が入っている。表面は丁寧な研磨が施されており,粗削りの痕跡は認められない。裏側は,中央付近の子勾玉は削り出されておらず,平面に仕上げられている。表面には凹凸が見受けられることから,面的に削って形を調整しているようである。細かい研磨が裏側全体にかけられており,光沢もあるため,表面が剝離している可能性は低く,元から子勾玉はなかったものと考えられる。径0.3㎝の孔が片面穿孔によって穿たれている。孔内には螺旋状の痕跡が見受けられるほか,縦方向のキズが複数個所に認められる。また,全体が内反りに湾曲した形となっている。

3　当館所蔵美濃ヶ浜遺跡出土の子持勾玉について

ここでは,当館所蔵美濃ヶ浜遺跡出土の子持勾玉(第３図 - ７)について,先行研究を基に型式分類を行い,時期を比定するとともに,その形態的な特徴を明らかにしたい。

子持勾玉は複雑な構造をしているため,様々な属性から型式分類や編年が行われてきた(佐々木1985,大平1989,篠原2002ほか)。ここでは,主に西日本出土の子持勾玉の型式分類,編年を行っている大平氏の研究に基づき,当館所蔵の美濃ヶ浜遺跡出土の子持勾玉の型式分類,時期の比定を行う(大平1989)。

大平氏は子持勾玉の背部の子勾玉を分類の属性とし,小勾玉が独立しているものをＡ型,連続しているものをＢ型に大別し,親勾玉の頭部・尾部を平面にしているものを１類,鋭角にしているものを２類に分類した。さらに,本体の断面と反りの比率から０～Ⅷ型式に分類した上で,５世紀前葉～７世紀後葉の型式編年を行った。この分類に基づくと,当館所蔵の美濃ヶ浜遺跡出土子持勾玉は,Ｂ型２類となり,反りの比率ではⅤ型式,６世紀後葉という帰属時期が与えられる。この時期は,美濃ヶ浜遺跡で製塩が行われていた時期とも合致している。また,中国地方出土の子持勾玉の分布,型式分類等の検討を総括的に行った米田氏は,Ｂ型２類の子持勾玉が,広島県・山口県といった中国地方西部の瀬戸内海側に多いことを指摘している(米田2020)。

続いて,当館所蔵の美濃ヶ浜遺跡出土の子持勾玉について,その形態的特徴をみていきたい。
まずは,表側にみられる特徴である。１点目に中央の子勾玉の作出方法について述べたい。多くの子持勾玉では,中央の子勾玉を親勾玉の側面から突出するように立体的に削り出すのに対し,本資料では,親勾玉を彫り込むような形で子勾玉を作り出している。これにより,中央の子勾玉は親勾玉の側面から突出しない形に仕上げられている。２点目は,条線が入っている点である。本資料には,前節で紹介したように４本の条線が入っている。３本はそれぞれ背部から中央の子勾玉を結ぶものと,腹部側から孔を結ぶものがある。これに関しては,類似の資料は少なくとも中国地方から出土している子持勾玉には見出せない。勾玉に条線を入れるものとしては,主に弥生時代中期～古墳時代中期にかけて生産・流通する「丁字頭勾玉」がある。これは,勾玉の頭の部分に数本の条線を入れるものであるが,その意味は明確にはなっていない。ただ,孔から放射状に施した条線が紐をかけるような表現であることから,何かを縛り込めることへの呪術性があるのではないかと指摘されている(木下1987)。当資料に施された条線にも,丁字頭勾玉と同様の意味合いがあった可能性がある。

次に,裏側にみられる特徴を挙げると,子勾玉の削り出しを行わず,平面に仕上げている点がある。子持勾玉は,基本的に両面が対称になるように作り出され,これは当資料のように扁平なタイプの子持勾玉も同様である。また,扁平タイプの子持勾玉は,中央の子勾玉を作り出さないものもあり,この場合も両面ともに小勾玉を作らない事例がほとんどで,片面のみの事例は見受けられない。

以上に挙げた特徴は,他の資料には見出すことができない点が多く,本資料が従来の子持勾玉の型式に則りつつも,独自性を持った資料であるといえるだろう。

おわりに

ここまで,府中高校地歴部による調査概要を紹介するとともに,当館所蔵の美濃ヶ浜遺跡出土の滑石製模造品(府中高校考古資料)を紹介し,そのうち子持勾玉について若干の考察を述べてきた。特に子持勾玉に関しては,型式的にみると遺跡の年代観と本資料の帰属時期に差はないものの,その形態には特異な点が多くあることが明らかとなった。

また,美濃ヶ浜遺跡で出土する滑石製模造品では,石材の色調や質が異なるものが使用されていることが当館所蔵資料からも確認できた。これに関しては,國學院大學博物館で美濃ヶ浜遺跡出土の滑石原石が所蔵されていることが報告されており,美濃ヶ浜遺跡において滑石製模造品の生産が行われていた可能性が指摘されている(北澤2016)。生産を行いつつ,他地域からも滑石製模造品を入手していたのだろうか。いずれにしても,美濃ヶ浜遺跡における生産と流通が多岐にわたっていることを示唆している。

今回紹介できた資料は,当館所蔵の美濃ヶ浜遺跡出土資料のうちの一部であるが,本稿が未だ遺跡の全容が明らかになっていない美濃ヶ浜遺跡の性格等のほか,瀬戸内地域の滑石製模造品の様相を考える上での一助になれば幸いである。

【註】

1 「見能ヶ浜」や「美能ヶ浜」とも記される。府中高校考古資料中の美濃ヶ浜遺跡出土資料は,「見能浜」の注記がある。本稿では,山口県遺跡地図の表記に合わせる(山口県教育庁1972)。

2 岡山県瀬戸内市牛窓町の師楽遺跡から出土する土器を標式とした古墳時代の製塩土器。昭和4年(1929)に水原岩太郎氏らが命名し,年代や分布状況等を研究している(水原1939)。

3 写真1の遠景写真や発表要旨(豊・善入1957)には,「兜山」ではなく,「甲高山」と記載されている。現在,美濃ヶ浜遺跡の北には兜山,さらにその北側には高山があるが,遠景写真の風景から兜山山頂からの撮影したものと判断した。

4 当館では,美濃ヶ浜遺跡出土資料(府中高校考古資料)として,滑石製模造品のほかにも,縄文土器片9点・石器剝片(縄文時代)3点・須恵器片73点・土師器片(製塩土器片含む)191点,石片(古墳時代)5点を所蔵している。

挿図出典

第1図:国土地理院地図に加筆。写真1・2:当館所蔵「豊元國資料」。第2・3図:筆者作成。図版:筆者撮影。

引用・参考文献

磯部貴文 2000「191　美濃ヶ浜遺跡」『山口県史』資料編　考古1,山口県

大平　茂 1989「子持勾玉年代考」『古文化談叢』第21集,九州考古学会

小川五郎 1925「周防国吉敷郡秋穂二島村美能浜遺物包含地発掘調査報告」『山高郷土史研究会考古研究報告書』山口高等学校郷土史研究会

小野忠凞 1961「6　美濃ガ浜遺跡」『山口県文化財概要』第4集,山口県教育委員会

北澤宏明 2016「山口県山口市美濃ヶ浜遺跡出土資料」『國學院大學博物館研究報告』第32輯,國學院大學博物館,

國學院大學学術資料センター
木下尚子 1987「弥生定形勾玉考」『東アジアの考古と歴史　中』岡崎敬先生退官記念論集,同朋舎出版
小南裕一 2012「９　美濃ヶ浜遺跡」『山口市史』史料編　考古・古代,山口市
國學院大學日本文化研究所 2002『子持勾玉資料集成』
佐々木幹雄 1985「子持勾玉私考」『古代探叢』Ⅱ,早稲田考古学会
篠原祐一 2002「子持勾玉小考」『子持勾玉資料集成』國學院大學日本文化研究所
豊　元國 1955「古代の製塩集落」『芸備文化』第１号,広島県学生生徒地方史研究会
豊　元國 1957「(三)師楽式遺跡と発見遺物」『芸備文化』第10・11合併号,広島県学生生徒地方史研究会
豊　元國・善入義信 1957「部会発表要旨　古代の製塩集落」『広島史学研究会大会プログラム』,広島史学研究会・広島県教育委員会・広島市教育委員会
水原岩太郎 1939『師楽式土器図録』
山口県教育庁社会教育課文化財係 1972『山口県遺跡地図』
米田克彦 2020「中国地方における子持勾玉の基礎的考察」『玉文化研究』第４号,日本玉文化学会
渡辺一雄 1994「Ⅱ－５　山口県」『日本土器製塩研究』,青木書店
渡辺一雄 2000「185　美濃ヶ浜遺跡」『山口県史』資料編　考古１,山口県

図版

斧形

剣形

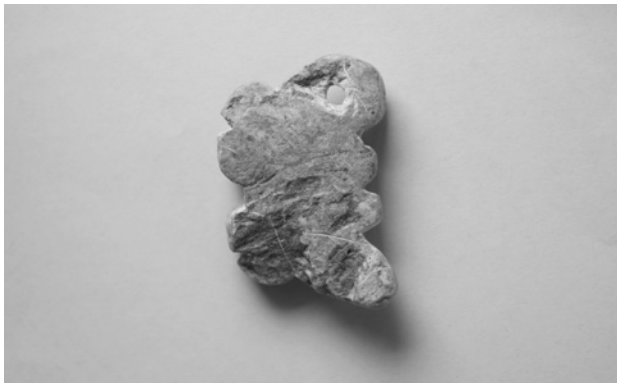
剣形

有孔円板

勾玉

勾玉

子持勾玉(表)



子持勾玉(裏)